

家族社会学会ニュースレター

Japan Society of Family Sociology Newsletter (web version)

No. 62

2019年5月15日発行

編集 筒井淳也 (庶務委員・広報担当)
発行 日本家族社会学会事務局
〒112-8606 東京都文京区白山5-28-20
東洋大学社会学部 西野理子研究室
☎ 03-3945-7722

目次

| | |
|-------------------------|----|
| 会長挨拶 | 1 |
| 日本家族社会学会第29回大会のご案内 | 2 |
| 第10期理事選挙のご案内 | 4 |
| 理事会報告 | 5 |
| 各委員会報告 | 7 |
| 第6回活動点検会員アンケート調査の結果について | 10 |
| 事務局だより | 12 |
| 会員異動 | 12 |
| 編集後記 | 14 |

会長挨拶

石井クンツ昌子 (日本家族社会学会会長／お茶の水女子大学)

令和最初の日本家族社会学会ニュースレターをお届けいたします。

本年度の大会は第9期理事会が担当する最後の大会となります。2016年からの目標として「国際化の加速」を掲げてきましたが、毎年、田間泰子委員長のもと研究活動委員会の皆さまにはこの目標に沿った素晴らしい企画を提供していただき、本学会の国際化の加速に大いに貢献していただいております。また、本学会会員の方々が国際社会学会、全米社会学会、全米家族関係学会を含む様々な国際学会の大会において研究報告をされるなど、本学会の国際化は確実に進んできていると思います。

本年度の第29回大会でも、実行委員会(神原文子委員長)と研究活動委員会のご尽力で素晴らしい企画が予定されております。まず、東アジアと欧米地域を含む国際的な視点から高齢社会における「生と死」に焦点をあてた国際シンポジウムを開催します。パネリストとして、韓国の高齢者論専門家の朴京淑氏をお迎えし、ヨーロッパの福祉に詳しい浅川澄一氏と墓と葬送に関する研究の

専門家であり米国の家族事情にも精通しておられる安藤喜代美氏にご登壇いただきます。また、討論者として高齢者や介護をテーマに北欧やアジア諸国との比較研究をしていらっしゃる西下彰俊氏にお願いしております。世界の様々な国で直面している「生と死」に関する問題や新しい知見について学ぶ大変貴重なシンポジウムであると確信しています。

本年度の大会では、過去2回の大会でも好評を博した若手研究者による企画も開催予定です。本企画では「英語での論文刊行を目指す研究者のためのワークショップ」と題して、英語で研究論文を執筆して海外へ積極的に発信したい研究者を対象としています。これまで量的データあるいは質的データを用いた英語論文を発信してきた経験が豊富な本学会会員からアドバイスをいただきます。また私も海外ジャーナル投稿のノウハウと査読プロセスについてお話をさせていただく予定です。国際的な学会大会における報告だけではなく、ご自身の研究を海外のジャーナルにおいても積極的に発信したい会員にはお薦めの内容になっています。企画自体は若手研究者を対象としていますが、勿論、他の皆さまにもご参加いただきたいと思います。

本年度の大会では、上記の他にも、国際セッションやポスターセッションも継続する予定です。皆さまのこれまでのご経験からもよくご存知だとは思いますが、ポスターセッションは聴衆者から直接コメントをいただく素晴らしい機会ですので、特に、大学院生の方々にはお薦めしたい報告形式だと思います。

本学会大会では勿論「新着」の研究報告をするあるいは拝聴することが重要な位置を占めますが、同時に、国内外の研究者とのネットワークを広げる貴重な機会でもあります。私は自分が大学院生のときに学会大会参加を初めて経験しましたが、いつも著書や論文の拝読を通してのみ存じ上げていた研究者に直接お会いしてお話することができ、とても感動したことを今でも鮮明に覚えています。皆さま（特に院生の方々）にも本学会大会において私と同じような経験をしていただければ幸いです。

自由報告の申込締切は5月末ですので、会員の皆さまには奮って応募していただきたいと思います。修士・博士課程の院生の研究報告も大いに歓迎いたします。多くの会員の皆さまに神戸学院大学で9月14・15日にお会いできますことを心より楽しみにしております。

日本家族社会学会第29回大会のご案内

神原文子（第29回大会実行委員長／神戸学院大学）

第29回大会は、神戸学院大学ポートアイランドキャンパスで開催いたします。

ポートアイランドキャンパスは、北に六甲山を、西には神戸港を見渡せる景観の地に、およそ12年前に開設された比較的新しいキャンパスです。大会会場となるD号館は、さらに新しく、およそ5年前に建ったばかりであり、快適な空間で学术交流を図っていただけるものと考えております。神戸の中心地・三宮からポートライナーや神姫バスの直行便に乗りいただきますと、15分くらいでキャンパスに到着いたします。

大会実行委員会は、実行委員長の神原文子のほか、都村聞人会員（神戸学院大学）、高梨薫会員（神戸学院大学）、永田夏来会員（兵庫教育大学）のメンバーで構成していますが、本学の実習助手や、学部の学生たちが協力してくれるものと期待しています。

充実した学会大会となりますように準備を進めながら、皆様のお越しを心よりお待ちしております。



- 1 日程：9月14日（土）、15日（日）
- 2 会場：神戸学院大学ポートアイランドキャンパス
〒650-8586 神戸市中央区港島 1-1-3
ポートライナー「みなとじま」駅下車徒歩7分
神姫バス「ポーアイキャンパス」下車 徒歩1分
- 3 参加費等：大会参加費、懇親会費は以下のとおりです。

| | 大会参加費 | | | 懇親会費 | | |
|---------|------------|----------|-------|------------|----------|-------|
| | 事前納付（会員のみ） | | 当日払い | 事前納付（会員のみ） | | 当日払い |
| | 郵便振替 | クレジットカード | | 郵便振替 | クレジットカード | |
| 一般 | 3500円 | 3500円 | 4500円 | 4500円 | 4500円 | 5000円 |
| 学生・減額会員 | 2500円 | 2500円 | 3000円 | 3500円 | 3500円 | 4000円 |

- 4 キャンセル料：
 - ・大会参加費：事前に振り込んでいただいた参加費は、原則、返金できません。ご了解ください。
 - ・懇親会費：①災害等で、大会開催7日前までに懇親会を中止せざるをえなくなった場合事前に振り込んでいただいた参加費は全額返金します。②大会開催6日前から前日までに懇親会を中止せざるをえなくなった場合、返金額、返金手続き等につきまして、web上でご案内させていただきます。ご理解のほどよろしくお願いいたします。
- 5 災害等の対応：

兵庫県南部に特別警報または暴風警報が発令されたり、JR西日本やポートライナーが運休したりする場合の対応につきまして、詳細は、大会ウェブサイト、大会ニュースNo.2にてお知らせします。
- 6 昼食：

両日とも、昼食はD号館1階のフードコート「シーガル」をご利用いただけます。500円程度の定食、カレーライス、麺類などを用意しております。
- 7 宿泊：

宿泊につきましては、各自で手配をお願いいたします。近年、関西圏への観光客が増加しておりますので、早めにご予約ください。
- 8 託児サービス：

大会中、学内で保育サービスを用意します。詳細につきましては、大会ウェブサイト、大会ニュース No.2にてお知らせいたします。

9 無線LANについて：

部会等が開催される教室ごとにルーターを設置し、共通のSSIDとパスワードをお伝えできるように、現在、準備中です。

10 大会に関するお問い合わせ

〒650-8586 神戸市中央区港島1-1-3 神戸学院大学現代社会学部 神原文子研究室内 日本家族社会学会第29回大会実行委員会 E-mail:jsfs-taikai@bunken.co.jp

ただし、ウェブでの大会申し込み、参加登録、事前納付等についてのお問い合わせは、以下の日本家族社会学会大会ヘルプデスクにお願いいたします。

E-mail:jsfs-desk@bunken.co.jp Fax:03-3368-2827

第10期理事選挙のご案内



本年度は、3年に1度の理事選挙の年です。選挙は「日本家族社会学会理事選挙規定」により、会員による郵送投票にて行います。

本学会では、2019年4月1日現在で、2018年度までの会費を完納している方に選挙権があります。2019年度から入会された方には、今回の選挙に関する選挙権はありません。被選挙権については、通算3期理事をつとめた者および顧問には被選挙権がないほか、学会理事会が定めた特定の理事も選挙権がありません。後者は、学会理事会の継続性を考えた措置です。

選挙区は「第1区」(北海道・東北・関東・甲信越：定員8名)と「第2区」(近畿・東海・北陸・中国・四国・九州<含む沖縄>：定員7名)に分かれています。選挙区は、有権者の4月30日時点での所属機関(所属機関のない者は、居住地)で定められます。所属する選挙区においてのみ、投票ができます。

投票は、3名連記の無記名投票でおこなわれ、得票数の多かった会員が第10期理事となります。理事選挙後、会長選挙が行われます。新会長候補者は、新理事の投票によって選出されますが、理事の互選ではないため、理事以外の会員が選出されることもあります。会長候補者は総会での承認をもって新会長に就任し、総会后に第10期理事会が発足します。

近日中に、会員の皆様に、「日本家族社会学会第10期理事選挙 選挙権・被選挙権者予備名簿」が送付されます。「予備名簿」で、まずはご自身の選挙権・被選挙権をご確認ください。とくに本年4月に所属先が異動された方は、ご自身の所属する選挙区が間違っていないかをご確認いただき、間違いがある場合は、すぐに指定の宛先にご連絡ください。予備名簿を用いての確認期間の後、6月中旬に本名簿と投票用紙等を発送します。投票期間は2週間で、投票の締め切りは、7月5日(必着)です。

本会の運営を担う理事会のメンバーを選ぶ選挙です。会員の皆様におかれましては、理事選挙に必ずご投票くださいますよう、お願いいたします。

西野理子(事務局長・東洋大学)

理事会報告

2018年度第3回（第9期第8回）理事会議事録（抄）

（略）

各委員会報告

編集委員会

編集委員会では、このニュースとほぼ同時期に31巻1号が皆様のお手元に届いていることと思います。31巻1号が東側編集の最終号、並行して西側が現在編集中の31巻2号が、9期編集委員会が担当する最終号となります。

9期を振り返るのはまだ少し早いのですが、今期では投稿・査読の電子化に着手するなどいくつかの新しい変更を致しました。今後も引き続き、投稿や査読がよりスムーズにできるよう検討し、次期に引き継ぎたいと考えています。査読時期や期間・回数については、9期以前からそして9期においても様々な意見を頂戴してきました。大学業務が増加傾向にあるなかで、定められた期間で査読しなければならない専門委員の負担が大きいことは編集委員会としても重々理解しています。専門委員の数を増やす、あるいは臨時専門委員にも積極的に依頼するなどの検討が必要な段階に来ているように感じています。投稿論文が惜しいところで掲載に至らないというケースについても、掲載につなげる工夫ができないか9期の反省をふまえて申し送りしていきます。

編集委員長としてニュース原稿を執筆するのも今号までとなります。投稿論文をお寄せいただいた会員の皆様、査読をご担当いただいた専門委員の皆様、ご寄稿いただいた会員の方々に、この場をお借りして編集委員会を代表して、心から感謝申し上げます。これからも会員の皆様全員で『家族社会学研究』を支えてくださいますようどうかよろしくお願い申し上げます。

（米村千代・千葉大学）

研究活動委員会

1. 第29回日本家族社会学大会（2019年9月14日（土）・15日（日））について

研究活動委員会は、神戸学院大学ポートアイランドキャンパスで開催される大会に向けて準備を進めています。3月6日には、第29回大会オフィシャルサイトを開設しました（<http://www.wdc-jp/com/jsfs/conf/2019/index.html>）。また、同日、会員の皆様に第29回日本家族社会学大会ニュースNo.1を発行しました。今回から、大会ニュース1号も電子化されていますので、大会ウェブサイトにてご覧ください。

今大会でも、「国際化の加速」という課題にもとづき、2つの取組みを行います。

第一に、大会シンポジウムは「高齢社会における生／死と家族」（仮）をテーマとして、朴京淑先生（ソウル大学教授）・浅川澄一氏（医療・福祉ジャーナリスト）・安藤喜代美会員（名城大学）、および討論者として西下彰俊会員（東京経済大学）によるパネルを企画しています。欧米とアジアの動向に詳しい方々をお招きして、国際比較の視点から行う公開シンポジウムです。どうぞ楽しみにお待ちください。

第二に、本委員会の若手委員が主となり、「英語での論文刊行を目指す研究者のためのワークショップ」(ラウンドテーブル)をもちます。これから取り組みたい方、またご経験のある方など、皆様の参加をお待ちしております。

報告者公募型テーマセッションの企画は、3月に締切り、応募がありませんでした。企画全体公募型テーマセッション・国際セッション・ラウンドテーブル・書評ラウンジなどの企画申請は、4月26日正午に締切りました。採択結果は個々にご連絡しています。

ポスターセッションは、大変好評で今大会でも継続します。自由報告(口頭)・ポスターセッション等の報告申込みは、報告要旨原稿とともに5月30日(木)締切です。月末31日ではありませんので、ご注意ください。上記の「大会オフィシャルサイト」にてお申し込みください。その際にはマイページと同じID(会員番号)とパスワードが必要です。皆様からのお申込みをお待ちしています。

大会参加費は例年と同じく、一般(事前)3,500円、学生(事前)2,500円、一般(当日)4,500円、学生(当日)3,000円です。参加申込みは、7月上旬から上記ウェブサイトで可能となります。昨年と同様、郵便振替用紙を郵送いたしません。大会プログラム(大会ニュースNo.2)は、7月上旬に大会ウェブサイトでの公開のみです(大会当日には印刷体をお渡しします。)

2. 大会要旨集について

今大会から、電子媒体のみとなります(大会オフィシャルサイトにて大会10日前に公開予定)。大会会場でネットにつながりにくい場合が考えられますので、公開後、できるかぎり事前にダウンロードしておかれることをお勧めします。

3. 報告申し込みの資格要件について

大会で報告していただく方は、申込み前に、本学会が定めた資格要件を満たす必要があります。メルマガでも周知していますが、大会ウェブサイトでご確認のうえ、年会費の支払い、また新入会員の方は入会申し込みなど、要件を満たしていただくようお願いします。

(田間泰子・大阪府立大学)

学会賞委員会

今期理事会から独立した委員会となった学会賞委員会では、昨年は新設された「奨励著書賞」の選考を行いました。今年は従来からある「奨励論文賞」の第8回目の選考の年です。選考対象は、学会誌『家族社会学研究』28(1)~30(2)の掲載論文、また同等の査読制度をもつ学会誌等の掲載論文で自薦・他薦されたもののうち、「修士課程修了後概ね10年以内の者」などの内規に規定された要件をみたす論文です。今回の選考対象論文は計14本で、現在選考委員会での選考を進めており、9月の学会大会総会時に結果発表を行います。

(池岡義孝・早稲田大学)

庶務委員会・事務局

1. 会勢について

2019年3月15日時点の会員数は731（一般会員554、学生会員107、会費減額会員70、賛助会員0、会費免除会員0）です。

2. 会員名簿のWeb化について

これまで会員名簿を3年に1回、冊子体で作成してきましたが、本年度より電子化に移行します。インターネットで学会の会員システム「マイページ」に入ってくださいますと、常に最新の状態で、会員の皆様の情報を検索してご利用いただくことができます。閲覧できる情報は、「氏名」「ふりがな」「所属先名」「会員種別」「専門領域」の公開必須項目と、個人が「公開可」を選択した項目です。選挙にもこのWeb名簿をご利用ください。

4月初旬に、会費請求とあわせて、会員登録の内容確認のお願いを送らせていただきました。ご確認いただかなければ、公開の可否について、これまでの登録内容を反映して公開させていただきます。もし、まだ確認していない会員の方がいらっしゃいましたら、確認ならびに修正はいつでもできますので、なるべく早くご対応ください。

3. 会費納入状況について

新年度の会費納入の依頼がお手元に届いていることと存じます。すみやかな会費納入にご協力くださいますようお願いいたします。なお、会費納入は可能な限り、郵便振込みないしは銀行振込みをご利用いただけますと幸いです（クレジットカードの場合、利用料が事務経費の負担になります）。また、カード決済が可能な期間は4-6月ですので、利用申し込みを含め、早めにご対応をお願いします。

4. 会費の減額申請について

常勤職にない会員の方は会費減額申請を行うことができますが、65歳未満の会員については、毎年申請し承認を受ける必要があります。承認の連絡を受けてから会費をお振り込みください。5月末が申請期限となっておりますので、お急ぎください。申請手続きの詳細は、学会ウェブサイトの「お知らせ/人事公募」>「会費減額申請」(http://www.wdc-jp.com/jsfs/notice/not_4.html)に掲載されています。65歳以上の会員の方は、一度承認されれば以後手続きの必要はありません。

(西野理子・東洋大学)

全国家族調査(NFRJ)委員会

1. NFRJ18に関する研究会活動

過去のニュースレターでもお知らせして参りましたが、NFRJ18は予定通り2018年度末に実施され、現在、データのクリーニングなどが行われています。今後の分析は、調査に向けた実行委員会として研究活動を行ってきた「NFRJ18研究会」を基盤に進められます。研究会への入会は締め切っておりますが、2018年度以降に新しく入会された会員の方には門戸を開いていますので、事務局までお知らせください。

NFRJ18本体の実査は終了しましたが、回答者の一部に質的な家族調査を行う「全国家族調査質的調査研究会」が研究活動を進めています。9月の学会大会では、テーマセッションを組織し、NFRJ18本体および質的調査研究会の概要についてご紹介する予定です。多くの会員の皆さまのお

越しをお待ちしております。

2. NFRJデータを用いた研究会活動

これまで、NFRJ-08 パネル研究会、家族社会学パネル研究会、NFRJ18 研究会を開催してきました。今後当面の間は上記の NFRJ18 研究会を中心に研究会活動を行ってまいりますので、ご関心のある方は

NFRJ ウェブサイトをご覧の上、ご参加ください (<http://nfrj.org/>)。

3. データ公開および研究成果の社会的還元

NFRJ のこれまでのデータ (NFRJ98、NFRJ-S01、NFRJ03、NFRJ08 等) は、東京大学 SSJ データアーカイブや ICPSR を通して公開されています。ぜひ研究にご活用ください。また、SSJ の利用資格がない場合も、学会員であればデータ利用は可能ですので、NFRJ 委員会事務局までお問い合わせください。NFRJ の最新情報は、ウェブサイトでご覧ください (<http://nfrj.org/>)。

各種研究会への参加、NFRJ18 研究会への参加、データ利用などについて、ご不明な点、ご意見などは、当面の間、全国家族調査委員会事務局 office☆nfrj.org (☆を@に変換) までお送りください。

(田淵六郎・上智大学)

第6回活動点検会員アンケート調査の結果について

木戸功 (庶務委員/聖心女子大学)

会員の皆様のご協力により、「日本家族社会学学会第6回活動点検会員アンケート」が終了いたしました。会員総数 731 名、有効回収数 74、回収率 10.1%でした。前回調査より回収率はやや下がり、今回も低い回収率となりました。予算の都合により Google フォームを利用して実施しましたが、今後も幅広い年齢層の会員のみなさまのご意見を反映することができるような、アンケート調査の実施方法や内容について検討することをひきつづきの課題と考えております。

詳しい調査結果は3月の理事会で報告され、各委員会において今後の活動を検討するうえでの貴重なデータとして活用いたしております。以下に、実施概要とともに各委員会からのコメントを掲載いたします。また今回は、自由記述による設問を多用したことから、別紙に集計結果とお寄せいただいた回答をまとめました。あわせてご覧ください。今回の調査について、ご意見やご質問がありましたら、お気軽に事務局までお寄せください。

実施概要

- ◆調査時期 2018年11月26日～2018年12月16日
- ◆調査方法 Google フォームを利用したWeb 調査
- ◆有効回収数 74 (有効回収率 10.1%, 会員数 731 名)
- ◆【回答者の属性】 (%)

問1 [年齢] 29歳以下 14.9%, 30～34歳 10.8%, 35～39歳 6.8%, 40～44歳 14.9%, 45～49歳 13.5%, 50～54歳 9.5%, 55～59歳 4.1%, 60～64歳 9.5%, 65～69歳 12.2%, 70

歳以上 4.1%

問2 [会員区分] 一般会員 70.3%, 学生会員 20.3%, 会費減額会員 6.9%

問3 [会員歴] 入会後3年未満 12.2%, 入会後3~5年未満 13.5%, 入会後5~10年未満 21.6%, 入会後10~15年未満 17.6%, 入会後15~24年 12.2%, 家族社会学セミナー以来の会員(24年以上) 23.0%

問4 [役員歴(複数回答)] 会長・顧問, 理事, 会計監事 21.6%, 複数年にわたる(専門)委員 33.8%, 単年度の委員 17.6%, 役員の経験はない 56.8%

※集計結果は、本レターの末尾にございます。

研究活動委員会より

皆様から多数のご意見をいただき、有難うございました。今期の新しい取組みであるポスターセッションや、「国際化加速」のためのシンポジウム・ラウンドテーブルなどの取組みも概ねご好評をいただき、委員会一同、とても嬉しく思っています。自由報告は増加していますが、部会のありかたや報告の質など課題があると認識しました。会場やプログラムについてご指摘の数々は、常に私どもも悩むところですが、最善を尽くしていますのでご理解のほどをお願いしたいと思います。今後の工夫についても多々ご提案いただき有難うございました。国際学会への関心が高まっていることを踏まえ、今後の活動に取り組んでいきます。

(田間泰子)

編集委員会より

投稿論文の受け付け方法が郵送からメール送付に変更になってことについて、いただいた意見は、すべて肯定的なものでした。今後も会員にとって利便的な方法を検討していきたいと考えます。査読制度については、査読経験者および投稿者の視点から様々な要望が出されています。継続的に検討していく課題であると受け止めています。英語による投稿論文については、できればぜひ投稿したい、できれば投稿したいという意見が35%程度あるものの、『家族社会学研究』に英語で投稿することの意義については、疑問の声も複数寄せられました。英語でも投稿できるように門戸を開きつつ、会員へアピールする方法を検討していく必要を痛感しています。J-STAGEは、よく利用する、ときどき利用するとの回答をあわせると75%程度となり、会員の間で利用が定着していることがわかりました。オンライン公開を早くしてほしいとの意見も複数あり、電子ジャーナル化に肯定的な意見と、紙媒体もあわせて刊行していくべきであるという意見両方が見られました。

国際化および電子化の促進は、本学会を超えた学術の大きな動向としてあります。そのなかにあつて『家族社会学研究』編集委員会として、会員の意見をふまえつつ、新しい時代に対応した編集方法を模索、検討してまいります。ご意見をいただいた会員の皆さまにお礼を申し上げます。

(米村千代)

全国家族調査(NFRJ)委員会より

全国家族調査の課題や意義について、貴重なご意見とご示唆をいただきありがとうございました。今期の委員会活動としては、現在ようやくNFRJ18の実査が終わり、これからデータを用いた研究活動が本格的に始動するところです。今回いただきましたご意見を生かしながら、今後より良い研

究活動をして参りたいと思います。引き続き会員の皆さまのご参加、ご支援をお願いいたします。

(田淵六郎)

学会賞委員会より

新設された「奨励著書賞」と従来からある「奨励論文賞」の双方について、概ね好意的な評価と励ましをいただきました。いくつかの注文もありましたが、そのなかで注目したいのが授賞の回数を増やしたり授賞者を多くした方がいいという提案でした。そのことで若手研究者の業績を増やし、外部からも注目されるだろうという理由からでした。現在は両賞とも3年に1回という間隔で理事任期とも連動しており、変更はそれほど簡単ではありません。しかし、理事任期に関わらず2年に1回にするとか、1回の授賞者を増やすということも考えられます。それらを次期委員会への申し送り事項に組み入れて、今後必ず検討するような道筋をつくりたいと思います。

(池岡義孝)

庶務委員会より

今期は、財政悪化に対応するため、ニュースレター等の電子化や会費値上げを決めました。それに対して肯定的に受け止めていただいているコメントが多く、事情をご理解いただいていることに安堵しました。その一方で、情報が正確に伝わっていない部分があることもわかりました。大会要旨集の公開時期はできる限り早くしており、メルマガの二重伝達は発生しておりません。また、2年間会費滞納による自動退会の制度はすでに導入されております。今回のアンケートでも、若手研究者への支援などさまざまなご意見やアイデアをお寄せいただきました。学会のあり方の様々な側面について、会員の皆様と情報を共有しながら取り組んでいきたいと考えております。

(西野理子)

事務局だより

第9期理事会も、最終年度を迎えました。財政悪化を受け、ニュースレターを電子化し、今年度からは会員システムを導入して、名簿を電子化しました。Web名簿にスムーズに移行して、理事選挙がつつがなく進行することを祈っているところです。

学会事務を国際文献社に委託してから年月がたっていますが、委託契約は、毎年行っています。毎年、コピー代金から人件費まで詳細な確認をして契約をしています。ほかにも、大会業務から編集業務まで、業務ごとに毎回、見積もりを見ながら内容を確認し、契約となります。第9期理事会では、理事複数名がかかわって確認することにしています。毎年行っている業務なので、委託先に任せしてしまいたいところですが、学会の財政を把握しながら運営していくために、理事が情報を共有する態勢にあらためました。

国際的な発信力のある魅力的な学会へと改革していくと同時に、運営組織の安定も守りつつ、次の期にひきつぎたいと考えています。今後も、ご協力を賜りますよう、どうぞよろしくお願いいたします。

(西野理子・事務局長、東洋大学)

会員異動

(略)

編集後記

新元号最初のニュースレターです。家族社会学会の発足が1991年(平成3年)ですから、学会になってからの歴史は、ほぼ平成と重なるのですね。いや、だからどうだというわけではないのですが、30年というのはそれなりの時間です。みなさまの平成はどんな時だったのでしょうか。私は平成が始まったときにはまだ10代だったのに、いまや50代目前です。編集(校正)作業も老眼との戦いです。

(筒井淳也・立命館大学)

- ◆調査時期 2018年11月26日～12月16日
- ◆調査方法 Googleフォームを利用したWeb調査
- ◆有効回答数74（有効回収率10.1%、会員数731名）

| 問1 | 年齢 | 度数 | % |
|----|--------|----|------|
| | 29歳以下 | 11 | 14.9 |
| | 30～34歳 | 8 | 10.8 |
| | 35～39歳 | 5 | 6.8 |
| | 40～44歳 | 11 | 14.9 |
| | 45～49歳 | 10 | 13.5 |
| | 50～54歳 | 7 | 9.5 |
| | 55～59歳 | 3 | 4.1 |
| | 60～64歳 | 7 | 9.5 |
| | 65～69歳 | 9 | 12.2 |
| | 70歳以上 | 3 | 4.1 |
| | 合計 | 74 | 100 |

| 問2 | 会員区分 | 度数 | % |
|----|--------|----|------|
| | 一般会員 | 52 | 70.3 |
| | 学生会員 | 15 | 20.3 |
| | 会費減額会員 | 5 | 6.9 |
| | 不明 | 2 | 2.7 |
| | 合計 | 74 | 100 |

| 問3 | 会員歴 | 度数 | % |
|----|----------------|----|------|
| | 入会后3年未満 | 9 | 12.2 |
| | 入会后3～5年未満 | 10 | 13.5 |
| | 入会后5～10年未満 | 16 | 21.6 |
| | 入会后10～15年未満 | 13 | 17.6 |
| | 入会后15～24年未満 | 9 | 12.2 |
| | 家族社会学セミナー以来の会員 | 17 | 23.0 |
| | 合計 | 74 | 100 |

| 問4 | 役員歴（複数回答） | 度数 | % |
|----|--------------------|----|------|
| | 会長・顧問・理事・会計監事のいずれか | 16 | 21.6 |
| | 複数年にわたる（専門）委員 | 25 | 33.8 |
| | 単年度に委員 | 13 | 17.6 |
| | 役員の実験はない | 42 | 56.8 |
| | 回答数 | 74 | |

(1) 最近の大会について

| 問5 | 学会大会参加 | 度数 | % |
|----|-----------------------|----|------|
| | ほぼ毎回参加している | 44 | 59.5 |
| | 2・3年に1度位参加している | 14 | 18.9 |
| | 以前はよく参加したが、近年は参加していない | 7 | 9.5 |
| | あまり参加していない | 5 | 6.8 |
| | 参加していない | 4 | 5.4 |
| | 合計 | 74 | 100 |

問6 大会の自由報告・テーマセッション・ラウンドテーブルなどの企画に関して改善・工夫 自由記述11件 (14.9%)

- ・毎年様々なトピックの自由報告があり充実していると思います。面白いラウンドテーブルがもっとあれば良いです。
- ・自由報告とラウンドテーブルで、教室が狭いことがある。
- ・提供されている内容は興味深いので特段なし
- ・特にありませんが、報告数が減っているようなので、増やすような工夫が必要ではないかと思います。他の学会との共催のセッションを作るとか？
- ・今年度の若手によるラウンドテーブルが面白かったので、継続して欲しい。
- ・家族社会学以外を専門とする研究者や実務家を交えた議論が必要と考えます。
- ・昔のようにどのようなジャンルの発表もある自由な雰囲気ではなく、一定の先生方の在籍学生さんが集う、その領域中心の発表会的雰囲気になったと感じるようになり、学会らしさの魅力を失い参加しなくなりま
- ・院生の発表で一定の質を保てるよう、指導教員の指導の周知が必要かと初めて思いました。
- ・自由報告と重ならないプログラムは難しいでしょうか？
- ・自由報告に関して、質疑や討論が報告別におこなわれ、部会全体を見通した議論があまりなされないように思われる。特定のテーマのもとに一つの部会を編成したのだから、大局的な議論展開ができるよう、進行に工夫が必要だと思う。このことに関連して、報告者のなかには、自分の報告時間だけ会場にいて、終わったら退席してしまう人が目立つようになった。注意喚起が必要だと思う。
- ・テーマセッションやラウンドテーブルなど、「企画もの」がある程度確保された方が学会としての充実度が上がるように思いますから、それらを一定数確保するようしてほしいと思います。

問7 大会の国際セッション（海外からの報告者中心）の企画に関して改善・工夫 自由記述7件 (9.5%)

- ・学会の国際化のために、より多くの海外からの研究者に報告をしてもらいたいです。また、海外からの報告者と日本の研究者が交流できるような機会をもっと作っていただきたいです。
- ・配布資料があると助かる。
- ・アジアか欧米といった区切りではなく、日本を中心に双方を集める企画
- ・できるだけ参加するように心掛けてはおりますが、他のセッションとカブるので参加するには限界があります。他の人も同じでは？
- ・日本の家族を研究している海外の研究者の参加があれば、と思います。
- ・良い試みと思っています。しかし、今年度については会場が広く端の方にいたためもあり、聞き取れませんでした。音響がよいこと、nativeではなく通訳がないのですからわかりやすい発音にしていただければ、多くの人がより理解できたことと思います。
- ・予算がほとんどないなかで、さまざまな工夫をして企画されていると思う。海外研究者などを独自に招へいすることはできないので、滞在中の研究者に関する会員の情報収集を積極的にこなうとよいと思う。

問8 大会のポスターセッションの企画に関して改善・工夫 自由記述8件 (10.8%)

- ・ポスターセッションは新しい企画ですが、とても活発な意見交換が行なわれていて良かったです。今後是非続けていただきたいです。
- ・質問時間が限られているし、それが昼食や委員会開催時間とかぶるので、会場内のアクセスのいい場所で開催してほしい。
- ・提供されている内容は興味深いので特段なし
- ・もう少し広い会場で行えたらよいと思います。
- ・国際セッションと同じで、できるだけ参加するように心掛けてはおりますが、お昼ご飯の時間とか、結構、忙しく、気がつけば、終わってたという感じですね。開催期間中に、区切って、何回かやる？とか。
- ・今後はもっと増やす方向で。ポスター作成の方法などをもっと活発に。口頭発表よりも研究交流の成果が上がるので。会場とポスター掲載用のパネルの充実を。
- ・いつもいいと思います。
- ・新企画が好評なので、もっと拡大してもいいと思います。

問9 大会時のシンポジウムに関して、取り上げてほしいテーマや改善・工夫 自由記述11件 (14.9%)

- ・国際的なテーマや海外からの研究者の登壇。
- ・国際セッションや国際的なシンポジウムがいつもあって、とても良いと思う。
- ・議論がかみあうよう、事前の打ち合わせは綿密に行っておいてほしい。

- ・提供されている内容は興味深いので特段なし
- ・時事性を重視して、外部の報告者も加え、一般参加者（たとえばシンポジウムのみ参加）を増やすようにすると良いではありませんか？
- ・「東アジアの高齢化・家族・福祉（介護）政策」です。
- ・革新的なもの、リアル社会に関連するものが良いのではないのでしょうか。
- ・40代30代の若い人がテーマを考えたら良いのではないのでしょうか。
- ・ACP(Advance Care Planning)について
- ・家族にかんする裁判を追ったことがあります。社会学の眼でみた家族に関する知見は判例にどう反映できるのだろうと考えてしまいました。
- ・自由報告と重ならないプログラムは難しいのでしょうか？
- ・テーマに関しては、研究活動委員会を中心によく検討されていると思う。以前は理事任期3年間で同一テーマで通していた時代もあったが、最初に綿密な全体計画を立てることは容易ではない。単発のほうが時宜に合った企画になるように感じる。

問10 **現在のプログラムの編成について** 自由記述8件（10.8%）

- ・プログラム編成は様々な企画のバランスが取れていて、とても良いと思います。
- ・自由報告で、報告趣旨とかなり異なるテーマ部会に割り振られることがある。
- ・よくわからない
- ・難しいことなのでしょうが、関心が重なりそうな部会・セッションを同時並行で立てるのはなるべく避けてほしい
- ・RC方式にして、常設枠を作ると良いのかも知れません。
- ・第25回（2018年度）大会に関しては、2日目の開始時間が少々早すぎるように感じました。
- ・ラウンドテーブルのような小さなセッションをたくさん設けると参加しやすいのではないかと
- ・いいと思います。

| 問11 | 国際学会・海外での学会参加 | 度数 | % |
|-----|-----------------------|----|------|
| | ほぼ毎年参加している | 11 | 14.9 |
| | 2・3年に1度位参加している | 20 | 27.0 |
| | 以前はよく参加したが、近年は参加していない | 9 | 12.2 |
| | あまり参加していない | 19 | 25.7 |
| | 参加していない | 13 | 17.6 |
| | 無回答 | 2 | 2.7 |
| | 合計 | 74 | 100 |

| 問12 | 国際学会や海外での学会報告を行いたいと思うか | 度数 | % |
|-----|-------------------------|----|------|
| | これまでも行ったことがあり、今後も取り組みたい | 44 | 59.5 |
| | これまでは行っていないが、今後は取り組みたい | 16 | 21.6 |
| | 国際学会または海外での報告には、関心がない | 12 | 16.2 |
| | 無回答 | 2 | 2.7 |
| | 合計 | 74 | 100 |

| 問13 | 今後、国際学会または海外で報告するために、役立つと思われるもの（複数回答） | 度数 | % |
|-----|---------------------------------------|----|------|
| | 国際学会または海外の学会の開催についての情報をメルマガで広報する | 48 | 64.9 |
| | 家族社会学会の大会で、国際セッションの数を増やす | 18 | 24.3 |
| | 家族社会学会の大会で、スキルアップや情報交換などの企画を実施する | 37 | 50.0 |
| | その他 | 5 | 6.8 |
| | 回答数 | 74 | |

その他（自由記述）：

- ・大会以外でも学会主催の英語研究論文の書き方に関するワークショップや編集委員会の企画なども開催していただきたいと思います。
- ・大学での仕事が忙しいので、せめて学会関係の仕事を減らして時間を作ること
- ・日本での開催があれば参加しやすい

・ISAなどは別して、スポット的に来る開催情報がもう少し早く入ると、準備しやすいのですが。そういう意味ではカレンダーのようなものがあるといいですね。

・国際学会での発表経験者と、経験はないけれど取り組みたい研究興味によるマッチング&共同発表促進

(2) 機関誌（『家族社会学研究』）について

| 問14 | 『家族社会学研究』をどの程度読むか。 | 度数 | % |
|-----|--------------------|----|------|
| | よく読む | 27 | 36.5 |
| | 関心のある部分だけ読む | 41 | 55.4 |
| | あまり読まない | 5 | 6.8 |
| | 無回答 | 1 | 1.4 |
| | 合計 | 74 | 100 |

| 問15 | 発行回数（年2回刊行） | 度数 | % |
|-----|-------------|----|------|
| | 1回で十分 | 8 | 10.8 |
| | 現行のままでよい | 64 | 86.5 |
| | 少ない | 1 | 1.4 |
| | 無回答 | 1 | 1.4 |
| | 合計 | 74 | 100 |

| 問16 | 「査読ガイドライン【公開用】」を知っているか | 度数 | % |
|-----|--------------------------|----|------|
| | ウェブサイトで閲覧し、役立った | 36 | 48.6 |
| | ウェブサイトで閲覧したが、あまり役に立たなかった | 2 | 2.7 |
| | 掲載されたことは知っているが読んでいない | 21 | 28.4 |
| | 知らなかった | 13 | 17.6 |
| | 無回答 | 2 | 2.7 |
| | 合計 | 74 | 100 |

問17 2018年より投稿論文の受付方法が郵送からメール送付に変更になったことについて 自由記述18件（24.3%）

- ・海外からの投稿者も増えるだろうから、メール送付はとても良いと思います。
- ・便利になった。
- ・特段なし
- ・良い
- ・まだ郵送だったのですか？ そういえば、審査書類もそうでしたか。早く、編集や審査も含め、すべて電子化する（ジャーナルも電子+紙）と良いと思います。
- ・メールのほうが海外在住者などが投稿しやすく、よいと思う。
- ・どこにいても受け取れるのでいいと思う
- ・便利になりよいと思う。
- ・郵送は複数部の印刷や郵便局へ行くなどの余計な手間とお金がかかり、かつ速報性も劣るため、メール送付になって良かったと思います。
- ・投稿者の手間を省くことができると考えるため、大変良い制度と思う。
- ・メール送付になったのはよいことだと思います。（利便性の観点から）
- ・メール送付は大変良いことだと思う。特に論文の提出は消印有効だが、査読対応の提出は期日までに到着する必要があり、東京23区とそれ以外で修正に使える期間に差があった。その差が実質的になくなったことは公平性を保つうえで重要な改革であったと思われる。
- ・効率性が高くなり、良いと思います。
- ・メールの方が手間がかからないと思う。
- ・良いと思います
- ・適切な対応だと思います。
- ・メール送付のほうが、投稿者、編集委員会双方にとって利便性が高いと思う。
- ・投稿方法が簡便になって良かったと思います。

問18

投稿論文の査読制度について

自由記述8件 (10.8%)

- ・丁寧な査読をしていただけるので、とても良い制度だと思います。
- ・査読委員の質をできるだけ均質化するよう、工夫してほしい。
- ・掲載論文数の多寡にこだわらず、しっかりした査読を継続してほしい。
- ・制度について特段意見はない
- ・長年、査読委員をさせていただきましたが、やってみると、大変、勉強になり、良い経験となるので、査読者になる人をどんどん増やして、入れ替えるようにされると良いかも知れませんね。心配なら、最初はサブでやってみよう。
- ・受理されしだいオンラインファーストを整備してほしい。現行では、投稿のタイミングによって掲載の号が事前に決まっているが、これでは必然的に査読が厳しくならざるを得ないのではないかと。C評価が続く限りは再査読にまわして、次号以降の掲載にまわしてほしい。
- ・原稿ではトピックの専門であるのか疑うようなコメントを受けたことがある。専門委員の拡充や臨時で割り当てる委員を増やすなどもう少し柔軟な運用をした方がいいのではないかと。また査読者1と査読者2のコメントが割れているときや、論文修正について異なる方針を示したときなど、編集委員会がもっと積極的に内容について編集方針を示すべきであると思う。現状では編集委員会はほとんど何もコメントせず、査読者1と査読者2が矛盾したことを言っている際には執筆者がその矛盾を解消しなくてはならなくなっている。編集委員会が矛盾を解消するような編集方針を示すべきである。
- ・投稿規程を遵守していただくように呼びかけていただければ、と存じます。

問19

英語による論文を投稿してみようと思うか。

度数

%

| | | |
|-------------|----|------|
| ぜひ投稿したい | 3 | 4.1 |
| できれば投稿したい | 23 | 31.1 |
| あまり投稿したくない | 30 | 40.5 |
| まったく投稿したくない | 14 | 18.9 |
| 無回答 | 4 | 5.4 |
| 合計 | 74 | 100 |

問20

英語による投稿論文について

自由記述12件 (16.2%)

- ・査読者の確保が大変だと思いますが、編集委員会から海外の研究者へ向けて積極的にアピールしてもらいたいです。
- ・筆者本人が英語で論文を書くことに意味が特段あると思われず（息するように執筆できればいいが）、英語校閲や翻訳をしてもらえば済むことだと思っているし、実際そうしている人もいると思う。現地調査や口頭報告する際には必要な能力だと思っている。それでも現地調査に通訳をつけることで解決している研究者もいるのだから、資金があれば英語での投稿は簡単だと思う。要は、論文自体の質と読者が誰かということだけだと思う。外国語話者の論文投稿を増やすためですか？査読者は英語でコメントするのですか？
- ・多分、どうせ英語で投稿するなら、海外のジャーナルへと考えるのでしょうが、とりあえず、英語論文を掲載してもらえるとこの点では敷居が低いと、思わせるようにすると、増えるし、投稿するメリットもあるのではと思います。英語で書くと、とにかく凄く時間を食うし、その割には日本の研究者には読んでもらえない（海外の人が英語読むこともまずない!）というデメリットもあるので、そこを何とかしないと辛いですね。英語論文だけ審査を別立てにして、掲載枠を1本必ず設けるとか？
- ・ネイティブチェックを受けるなど、常勤ではない人には経費上ハードルが高いように思われる。他方、常勤は忙しすぎてじっくり英語に取り組めないということもある。
- ・現状『家族社会学研究』の読者はほぼ日本で日本語で研究している研究者なので、『家族社会学研究』への投稿論文を英語で執筆するインセンティブはほとんどない。
- ・日本語のジャーナルに英語で投稿する意義がよく分からない。
- ・英語が堪能ではない若手の意見なので聞き流していただいてよいのですが、英語で論文を執筆・投稿する労力を考えると、家族社会学研究が投稿先の第一の候補にはならないのではないかと気がします（早く出したい・国際学会の報告の前に出しておきたいといった事情であればWP、国際的に通用する業績志向であれば英語圏の査読誌になるのかなあと）。私はすぐに英語で投稿できる状況にはないのですが、ともあれ編集委員の先生方のご負担が増えなければいいなと個人的には思います。
- ・英語による投稿論文は必要ない。

- ・誰が読むのでしょうか？
- ・日本の雑誌に英語投稿しても研究者がうける評価は低いので関心はありませんが、海外雑誌に掲載されないけれど良い研究を海外の人にも読めるようにという意味ならば良いと思います。
- ・英語で論文を投稿するのであれば、海外のジャーナルに投稿しようと思う。
- ・もっと多くの会員にチャレンジしてほしいと思います。

問21

『家族社会学研究』で取り上げて欲しいテーマ

自由記述8件 (10.8%)

①特集、②研究動向、③政策資料解説、④NFRJレポート、⑤その他(執筆適任者も)

・①タイムリーなトピック(例:LGBT+家族)について研究が進んでいる海外(例:アメリカ)の研究者の論文を特集とする。②海外の研究動向についてより知りたい。③海外の家族政策(例:北欧諸国)についての解説を読みたい。④NFRJデータを利用してどのような研究やどのような分析がされているのかの報告を読みたい。⑤英語で書かれた掲載論文を増やしてほしい。

・よく分からない

・2 多様な家族 野沢慎司先生

・①特集、国際家族とか、家族の国際化のような現象。②研究動向:家族形成過程の一般モデル化:ライフコースと人口・世帯動態の関係を③政策資料解説:家族政策に対する家族社会学的視点からの解説と議論

・②特に国外の計量的なケア研究(老親介護、障害者介護、子育て含め)のレビューがあれば読みたいです。(菊澤先生など?)

・①「東アジアの高齢化・家族・福祉(介護)政策」です。東京経済大学の西下彰俊先生にご執筆いただければ、幸いです。

・②研究動向

・「研究動向」はどちらかという雑誌分量を維持するための埋め草的な企画になっているが、家族社会学の周辺領域だけでなく、主要テーマを定期的にレビューするなどの取組もあってよいと思う。

問22

J-STAGEで『家族社会学研究』をどの程度利用しているか

度数

%

| | | |
|-----------|----|------|
| よく利用する | 27 | 36.5 |
| ときどき利用する | 28 | 37.8 |
| ほとんど利用しない | 11 | 14.9 |
| 利用したことがない | 7 | 9.5 |
| 無回答 | 1 | 1.4 |
| 合計 | 74 | 100 |

問23

電子ジャーナルについて

自由記述9件 (12.2%)

・海外への研究発信としては特に良いと思います。

・そろそろ導入を検討してもいいと思う。

・効率的でありがたい

・機関誌の発行の一年後にオンラインで公開されますが、もう少し早く(半年後・同時など)公開してほしいです。

・非常に便利で良いが、一覧性はないし、いつ無くなるかわからない(J-stage自体も含め)ので紙媒体も残す必要がある。

・冊子と比べて興味のある論文を自分で保管しておくのに便利であるので、今後も継続して電子化してほしい。

・『理論と方法』のように査読論文については、即時公開を目指したほうが『家族社会学研究』がより引用されやすくなるのではないかと。

・学会員になる前の論文も閲覧できるので大変便利だと思う。

・学会員への学会誌発行もデジタルに変更していただけてよいです。

問24

機関誌の編集方針について

自由記述5件 (6.8%)

・とても公平な編集方針だと思います。

・よく分からない

・家族社会学研究は、よく頑張っていると思います。大事な研究誌なので、今後も、よろしく願います。

・2回で査読を終わらせるのではなくある程度クオリティが高いと編集委員会が判断したものは当該の号に乗せなくても2回目の修正に回してもいいのではないかと。

・投稿論文をもっと増やさないと、学会進歩の報告だけでは学会の将来が暗い。投句論文を増やす努力をしてほしい。

(3) 全国家族調査 (NFRJ) について

| 問25a | [第1回全国家族調査 (NFRJ98)] についてどの程度知っているか | 度数 | % |
|------|-------------------------------------|----|------|
| | 内容について知っている | 46 | 62.2 |
| | 名前だけ知っている | 22 | 29.7 |
| | ほとんど知らない | 4 | 5.4 |
| | 無回答 | 2 | 2.7 |
| | 合計 | 74 | 100 |

| 問25b | [全国調査「戦後日本の家族のあゆみ」 (NFRJ-S01)] についてどの程度知っているか | 度数 | % |
|------|---|----|------|
| | 内容について知っている | 35 | 47.3 |
| | 名前だけ知っている | 24 | 32.4 |
| | ほとんど知らない | 11 | 14.9 |
| | 無回答 | 4 | 5.4 |
| | 合計 | 74 | 100 |

| 問25c | [第2回全国家族調査 (NFRJ03)] についてどの程度知っているか | 度数 | % |
|------|-------------------------------------|----|------|
| | 内容について知っている | 45 | 60.8 |
| | 名前だけ知っている | 22 | 29.7 |
| | ほとんど知らない | 4 | 5.4 |
| | 無回答 | 3 | 4.1 |
| | 合計 | 74 | 100 |

| 問25d | [第3回全国家族調査 (NFRJ08)] についてどの程度知っているか | 度数 | % |
|------|-------------------------------------|----|------|
| | 内容について知っている | 45 | 60.8 |
| | 名前だけ知っている | 23 | 31.1 |
| | ほとんど知らない | 4 | 5.4 |
| | 無回答 | 2 | 2.7 |
| | 合計 | 74 | 100 |

| 問25e | [NFRJ08パネル調査] についてどの程度知っているか | 度数 | % |
|------|------------------------------|----|------|
| | 内容について知っている | 33 | 44.6 |
| | 名前だけ知っている | 31 | 41.9 |
| | ほとんど知らない | 8 | 10.8 |
| | 無回答 | 2 | 2.7 |
| | 合計 | 74 | 100 |

| 問26a | 全国家族調査 (NFRJ) 委員会の活動・成果について、どのように評価するか [NFRJデータの質] | 度数 | % |
|------|---|----|------|
| | 非常によい | 20 | 27.0 |
| | よい | 35 | 47.3 |
| | わからない | 15 | 20.3 |
| | よくない | 1 | 1.4 |
| | 非常によくない | 0 | 0.0 |
| | 無回答 | 3 | 4.1 |
| | 合計 | 74 | 100 |

| 問26b | 全国家族調査（NFRJ）委員会の活動・成果について、どのように評価するか [東京大学SSJデータアーカイブを通じてデータを一般公開していること] | 度数 | % |
|------|---|-------|------|
| | | 非常によい | 45 |
| | よい | 21 | 28.4 |
| | わからない | 5 | 6.8 |
| | よくない | 1 | 1.4 |
| | 非常によくない | 0 | 0.0 |
| | 無回答 | 2 | 2.7 |
| | 合計 | 74 | 100 |

| 問26c | 全国家族調査（NFRJ）委員会の活動・成果について、どのように評価するか [実査終了から一般公開までの迅速さ（現在約2～3年）] | 度数 | % |
|------|---|-------|------|
| | | 非常によい | 24 |
| | よい | 34 | 45.9 |
| | わからない | 10 | 13.5 |
| | よくない | 4 | 5.4 |
| | 非常によくない | 0 | 0.0 |
| | 無回答 | 2 | 2.7 |
| | 合計 | 74 | 100 |

| 問26d | 全国家族調査（NFRJ）委員会の活動・成果について、どのように評価するか [ウェブサイトを通じての情報公開] | 度数 | % |
|------|---|-------|------|
| | | 非常によい | 28 |
| | よい | 32 | 43.2 |
| | わからない | 9 | 12.2 |
| | よくない | 3 | 4.1 |
| | 非常によくない | 0 | 0.0 |
| | 無回答 | 2 | 2.7 |
| | 合計 | 74 | 100 |

| 問26e | 全国家族調査（NFRJ）委員会の活動・成果について、どのように評価するか [調査項目の学会内での公募] | 度数 | % |
|------|--|-------|------|
| | | 非常によい | 23 |
| | よい | 37 | 50.0 |
| | わからない | 10 | 13.5 |
| | よくない | 2 | 2.7 |
| | 非常によくない | 0 | 0.0 |
| | 無回答 | 2 | 2.7 |
| | 合計 | 74 | 100 |

| 問26f | 全国家族調査（NFRJ）委員会の活動・成果について、どのように評価するか [NFRJ実行委員の人選] | 度数 | % |
|------|---|-------|------|
| | | 非常によい | 11 |
| | よい | 29 | 39.2 |
| | わからない | 26 | 35.1 |
| | よくない | 5 | 6.8 |
| | 非常によくない | 0 | 0.0 |
| | 無回答 | 3 | 4.1 |
| | 合計 | 74 | 100 |

| 問26g | 全国家族調査（NFRJ）委員会の活動・成果について、どのように評価するか [学会員からの意見や要望の聴取] | 度数 | % |
|------|--|-------|------|
| | | 非常によい | 16 |
| | よい | 29 | 39.2 |
| | わからない | 22 | 29.7 |
| | よくない | 4 | 5.4 |
| | 非常によくない | 0 | 0.0 |
| | 無回答 | 3 | 4.1 |
| | 合計 | 74 | 100 |

| 問26h | 全国家族調査（NFRJ）委員会の活動・成果について、どのように評価するか [『家族社会研究』でのNFRJレポート] | 度数 | % |
|------|--|-------|------|
| | | 非常によい | 22 |
| | よい | 41 | 55.4 |
| | わからない | 6 | 8.1 |
| | よくない | 2 | 2.7 |
| | 非常によくない | 0 | 0.0 |
| | 無回答 | 3 | 4.1 |
| | 合計 | 74 | 100 |

| 問26i | 全国家族調査（NFRJ）委員会の活動・成果について、どのように評価するか [家族研究への貢献（研究活動や学会大会でのテーマセッション）] | 度数 | % |
|------|---|-------|------|
| | | 非常によい | 30 |
| | よい | 33 | 44.6 |
| | わからない | 7 | 9.5 |
| | よくない | 1 | 1.4 |
| | 非常によくない | 1 | 1.4 |
| | 無回答 | 2 | 2.7 |
| | 合計 | 74 | 100 |

| 問26j | 全国家族調査（NFRJ）委員会の活動・成果について、どのように評価するか [NFRJの成果の刊行（『日本の家族 1999-2009』など）] | 度数 | % |
|------|---|-------|------|
| | | 非常によい | 33 |
| | よい | 29 | 39.2 |
| | わからない | 7 | 9.5 |
| | よくない | 1 | 1.4 |
| | 非常によくない | 1 | 1.4 |
| | 無回答 | 3 | 4.1 |
| | 合計 | 74 | 100 |

| 問26k | 全国家族調査（NFRJ）委員会の活動・成果について、どのように評価するか [これまでのNFRJ委員会のとりくみ全般] | 度数 | % |
|------|---|-------|------|
| | | 非常によい | 27 |
| | よい | 35 | 47.3 |
| | わからない | 9 | 12.2 |
| | よくない | 0 | 0.0 |
| | 非常によくない | 0 | 0.0 |
| | 無回答 | 3 | 4.1 |
| | 合計 | 74 | 100 |

| 問27 | 学会が主体となって公共利用データを作成していくことについて | 度数 | % |
|-----|-------------------------------|----|------|
| | 今後とも必要 | 65 | 87.8 |
| | 今後は必要ない | 0 | 0.0 |
| | どちらともいえない | 5 | 6.8 |
| | わからない | 3 | 4.1 |
| | 無回答 | 1 | 1.4 |
| | 合計 | 74 | 100 |

問28 **全国家族調査および全国家族調査委員会について** 自由記述12件 (16.2%)

- ・とにかく情報の共有を積極的に行なっていただきたいです。
- ・よく分からない
- ・非常に重要な調査であり、評価もしておりますが、あまりお役に立てず申し訳ないと思っております（声がかからないと、自分からは何もしない性格なので）。そういう意味では、基本的にボランティア的に運営されていますが、役に立ちそうな人に声を掛けて動員するという手もありますのでご一考下さい。とにかく、大変でしょうが、続けられることを期待しております。
- ・学会が主体になること良い面・悪い面あるとは思いますが、どうも多方面におもねりすぎて動きが鈍いように感じる。今後はSSMのような運営方針が機動力もあってよいのではないかと。
- ・NFRの強みは、家族関係に重点を置いている点であると思っています。私はあまりコミットメントしていませんが、最近の議論を聞くと、「非典型的な家族」をとらえるというところにやや重点が置かれがちのような気がしています。もちろん、非典型的な家族をきちんと調査することは間違いなく重要ですが、大規模調査でやるのはコストが悪く思っていることが多いです。質的研究でやるべきこと、量的研究でやるべきこと、NFR等の大規模調査で測定すべきこと、小規模調査で扱うべき問題を整理する必要があるのだろうなとよく思います（NFRの委員の先生方は認識されていることだと思うので、特に主張したいことでもないのですが。）
- ・日本家族社会学会として理論的に日本の家族をどうとらえていくのかを考えたいので調査をしなくては結局過去の調査結果の焼き直しのような結果を得るだけで新しい知見が得られていないのではないかと、それでは科研費はとれないと思われる。
- ・よりデータの二次分析が進むよう、学会が主導となって何か企画をやっても良いかと存じます。
- ・是非とも継続していただきたいです。
- ・パネル調査はやめた方がよい
- ・家族研究に必要となる大変貴重なデータなので、長く継続されてほしい。
- ・NFRJを用いた研究論文が『家族社会学研究』にあまり掲載されていない
- ・大変なエネルギーを必要とする活動ですが、重要なものなので継続して欲しいと思います。

(4) 学会賞について

問29 **新設された「奨励著書賞」について** 自由記述11件 (14.9%)

- ・家族社会学関連の多くの素晴らしい著書が出版されていますし、若手にも著書執筆を奨励するという意味で、この新設はとても良いと思います。
- ・回数を増やすことで、若手研究者に業績を増やしてほしい。
- ・よく分からない
- ・残念ながら、あまりフォローしておりませんでした。
- ・短い論文では書ききれないこと、本だからこそ厚みをもって書ける部分が評価できるので、新設されたことは素晴らしい事だと思う。
- ・もっと大量に賞を与えたほうが家族研究者が活躍しているような感じが出せて家族社会学会としてはいいのではないかと
- ・しばらく見守っていきたい。
- ・適切な授与であったと思います。
- ・若い人の励みになると思うのでぜひ継続を、
- ・大変良い企画だと思います。
- ・学会の非常に重要な事業だと思うので、今後も継続してほしい。

| | | |
|---|-------------|---------------|
| 問30 | 「奨励論文賞」について | 自由記述7件 (9.5%) |
| <ul style="list-style-type: none"> ・多くの素晴らしい論文のエントリーがあれば良いと思いますので、MLなどの周知を積極的に行なってほしいと思います。 ・回数を増やすことで、若手研究者に業績を増やしてほしい。 ・よく分からない ・どの学会でもそうなのですが、学会賞や論文賞は外部の関心を惹かないと、駄目なのかも知れませんね。パブリシティを工夫されると良いかも知れません。論文賞の方は、どこかの出版社と組んで、受賞者には出版の話が来るとか。 ・もっと大量に賞を与えたほう（佳作とか森岡清美賞とか）が家族研究者が活躍しているような感じが出せて家族社会学会としてはいいのではないか ・選考は大変と思われるが、家族社会学研究を中心に選ぶことで続けると良い。 ・『家族社会学研究』掲載論文以外の自薦・他薦論文が少ないので、情報の周知にいっそう力を入れていただきたい。 | | |

(5) 庶務委員会関係

| | | |
|--|---------------|-----------------|
| 問31 | 学会ニュースレターについて | 自由記述10件 (13.5%) |
| <ul style="list-style-type: none"> ・電子媒体になり、どこからでもアクセスできるので、良かったと思います。学会の情報を共有できる貴重な媒体だと思いますので、今後も続けてほしいです。 ・特段ない ・残念ながら、ちらっとみるだけで、あまりじっくり読んでいる時間がありません。 ・メール配信のみでいいのではないのでしょうか。 ・個人的にはいつもありがたい情報提供だと思っていますが、メールの時間帯がいつも深夜なので、事務局の先生方のご負担になっているのではないかと心配になります。一若手の意見ですが、学会の事務コストの削減はしてもいいのではないかという気がしています。 ・印刷物、郵送形式はもうなくても良いのではないかと。メルマガだけでよい。学会の総会記録や会計報告等は学会誌に掲載することで良い。 ・現状でよいです。 ・学会全体の活動について大まかに知ることができるので、助かっております。 ・特にない ・冊子体を郵送するのではなくメール送付になったのは時代の趨勢に従ったことで、いいことだと思います。 | | |

| | | |
|--|--------------|----------------|
| 問32 | 学会ウェブサイトについて | 自由記述8件 (10.8%) |
| <ul style="list-style-type: none"> ・概ね良いと思いますが、英語の部分をより充実させていただきたいと思います。 ・よい。 ・大会の時ぐらいいしか見ませんが、何か調べ物などする時に便利なサイトにすると、アクセスが増えると思います ・良いと思う。 ・大会前後で有効 ・現状でよいです。 ・大会の報告要旨公開があまりにも直前である。関心のあるタイトルを見ても、わざわざ聴きに行くべきか否かは決定できず、要旨集で判断したいので、ホテルを予約するためにも、もう少し早く（1ヶ月前以上に）公開して欲 ・特にない | | |

| | | |
|---|-------------|-----------------|
| 問33 | メールマガジンについて | 自由記述14件 (18.9%) |
| <ul style="list-style-type: none"> ・いつも読ませてもらっていますが、大変参考になります。国際化に関する情報を含めて、積極的な発信を続けてほしいです。 ・ひろく研究会情報をもっと早く手に入ると学内業務と調整しやすい ・同じく、ちらっとみるだけですが、速報性があるので、便利ですね。 ・夜遅くに配信されるのはあまりうれしくはないです。 ・研究会などのさまざまなお知らせを受け付けてくださって、とても参考になります ・いつも役立つ情報が送られてくるので有難いと思っています。 ・同じメッセージを複数回送るのはやめていただきたい ・シンポジウムや講演等の情報も定期的に送られており、大変参考になっています。 | | |

- ・情報提供が有効
- ・特にないです。
- ・いろいろな情報がいただけて、助かっています。
- ・他の学会や研究会の開催情報も流してくださっているので有り難い。
- ・特にない
- ・いつもたくさんのお情報を送っていただいて、役に立ちますし感謝しています。

問34 **入退会について** 自由記述4件 (5.4%)

- ・特にありません。
- ・よく分からない
- ・読んだことがないので、わかりませんが、去るものは追わずで、あっさり退会できるといいですね。
- ・入会を促進する方策を議論したほうが良いです。

問35 **会費金額や支払い方法、財務内容について** 自由記述8件 (10.8%)

- ・今期の理事会は財政面で色々検討することが多く大変な労力を費やしていただいたと思っています。その結果の会費の変更はやむおえないと感じています。様々なコストダウンの努力に対しても感謝しています。
- ・学生や非常勤自分に減額制度があって、資金面では当然だが、精神的なサポートを受けられたことに大変感謝している
- ・退職したので、今年度の途中から減額会員して頂き、喜んでおります。退会防止の役に立ちます（他のいくつかの学会は退会しました）ので、制度として定着するといいいですね。
- ・資金面では中立性ということを保証しながら企業などとのコラボレーションなどを検討してみてもいいと思
- ・学生会員、特別減免措置の会員などは据え置いて、一般会員の会費を値上げすることで、財務状況の改善をはかることが必要です。
- ・学生会員です。減額をしてくださりとてもありがたいです。
- ・少なくとも一般会員は会費金額を1万円程度まで上げるべき
- ・2018年度の大会で未払いの会員の方が多いことを知りました。他の学会のように、2年間滞納の場合は会員資格を失うなどの規約を設ける必要があるかと存じます。

問36 **家族社会学会の在り方や活動について** 自由記述13件 (17.6%)

- ・一期の理事会だけの努力ではなく、これからも学会全体の国際化は必須だと思いますので、より充実した国際関連の活動を展開していただきたいです。
- ・収支が厳しいようだが、大切な学会なので存続するよう、理事会の方々にお願いしたい。
- ・よく分からない
- ・ゼミの時代からの長い、お付き合いですが、今後ともよろしく。
- ・ある程度、学会の資金のたくわえがあったと思うので、若手の活動に特別支出としてまわしてほしい。学会前日にスキルアップの講義を設けたり、学会参加のトラベルグラントを設置したりなど。
- ・学会大会の懇親会の時に、研究テーマごとのテーブルや目印などがあると、特に大学院生など学会参加経験の少ない研究者のネットワーキングに役立つかなと思います。
- ・勝手な若手の意見ですが、財政難だと伺っています。関連学会との提携などによって、事務コストの削減などは難しいのでしょうか。
- ・活力ある学会を目指したほうが良いと思うがもっと大学院生の活動を支援するような学会活動をしていただきたい。（たとえば大学院生の学会での発表を表彰する制度を設けるなど）そうしたほうが家族社会学会会員の大学院生が活躍している雰囲気が出しやすくなると思われる
- ・家族政策に寄与できるように積極的に発信していく方向性が重要です。
- ・このような取り組みをするなど見直し活動が積極的だと思います。
- ・メルマガで他学会の開催情報をお知らせするように、本学会の大会内容を事前（少なくとも1ヶ月前に）会員以外の方も知ることができる媒体を広げて、興味を持った方が気軽に参加できるようになったらいいと思います。
- ・特にない
- ・今後も若手研究者の育成にいっそう力を入れていただきたい。また、若手研究者は学会を、研究発表や論文投稿などの自己に益する場として活用するだけでなく、学会を支え貢献する立場でもあることに思いを致してほしい。